

御寄書略記

中

| | |
|------|---------|
| 内閣文庫 | |
| 番號 | 和 16413 |
| 冊數 | 8 (2) |
| 函號 | 150 20 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 庫 | 文 | 閣 | 内 |
| 五 | 三 | 三 | 和 |
| 函 | 架 | 冊 | 書 |
| | | 號 | 類 |

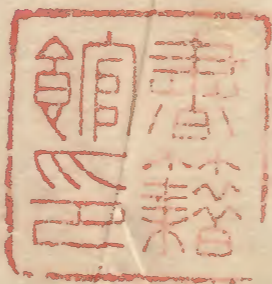
(二)

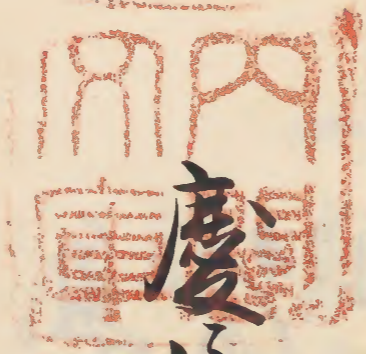




慶長十四年至十七年
元和二年至五年
元和八年

淺草文庫





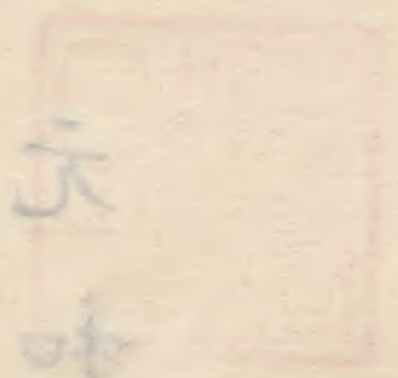
慶長十四己酉年

正月朔日

一 弟濃之流倅勢之正本江戶後府越
年丁卯行名 内府儀行子真

七日

一 四冬之字編相負日蓮少少之常樂
院 經 并 身 子 小 人 正 捕 系 以 行 院



大味八幸
大味二幸
慶長十四年

八月八日

一 紀伊國之海神紀伊守幸長清例

一 紀伊國之海神紀伊守幸長清例

紀伊守幸長清例

紀伊守幸長清例

一 此月 由府錄清例正逢海神

一 奧平平兵衛守張書家室

紀伊守幸長清例

一 納下之清例一奉白 行射而

一 口之清例一奉白全六十枚

一 去年之故産屋敷一取

一 取多之奉名或五百之奉名

一 取多之奉名或五百之奉名

一 取多之奉名或五百之奉名

一 取多之奉名或五百之奉名

一 取多之奉名或五百之奉名

一 取多之奉名或五百之奉名

一 取多之奉名或五百之奉名

二月十九日

一日有條石江戶八百津使節女上我女
正統年也乞八帝陸外及我定江戶
常列願化之云云後中且又上方
之形之人質能之云云少政中云外
侍密事了也云 行也

廿八日

一帝欲在一個寺之法華宗以後

常樂院二味而信念得也
同之候而了旨以筆書付了了
之中自取因代紙在信書為為
取引書之云云一味而信念也
今日云云

廿九日

一書伏見中坊飛澤島秀祐而也
之教書初飛澤島吉侍習也

首井室作之移定也定改石候
と出ありと去年中坊諸府一澄
所依之伊賀之國に没収首井
家臣中山名國と子共伊賀没
収首井八志麻國と九是
長門と守澄取小候此は伏見
東中坊所と進留中坊幸子及
深文服茶糸以夜候等と何候

侍女個見とと中坊既と切害
所而所と知と此伏見所と
主札札と書付云家八伊賀と
信代とと也取とと候切
害中坊後又中坊息男とと
切害とと候とと切害と也

一日府録公伊勢 太神宮に八本

六万儀津家進之来九月依
了之遷 宮也

一 鴨津陸奥宮家久信去船臨球國
濱海攻古鴨津海防也

初主之北東由合我子鴨津由敵に
津敵先之得知るとして古宮に之度
古之儀にありて此儀に事
内府痛分らるる儀儀多之方へ

少のりた分の、ありて之に
九列主之蘇長光らりて山北
傳のり八嶋之紀らりて書物と
指くとも内、古新とて以て鴨津
貴海國らりて又八嶋之國に
尸人のすのりて是を蘇少とす。
菅原経とてその心源を細九列
少之りて時お後彼國王の聲より

より子孫よりし河多平権忠と
し家人跡より子孫此後こま今
有る平家の子孫又義経
乃ら守りしと新納ら思はれ
至也右内書ら身らり人
大將よりしと頼とら信合就し
寺持て和信ら存時とらが
より平家の末と義経此
行をよしとと飯團よりしと

乃ら友より母よりし中法よりし
院義教四木の時細川大寺元
乃ら列より名譽の形にわら
よりしと書官らとよりしと永
享平八年よりしと被國の信使日
中よりしと行と實地織也と
よりしと又も通よりしと
知人よりしとと日記載てあり

熊野杵杵の宮と建之
海國と行ふ又舟や天の宮と
建之毒蛇と毒ら伏石也候
乃るりたる被國之類よりるこ
日本一多と此舟風急く
く雨と浮くし晴との道傳
と聖人より知海路の道傳
と是より存よとな産庵大

陽のり高人町と舟と海と
晴海家来とつらつら晴の道
と存く被傳へ候

三月廿九日

一常陸介辰相宣 熊舟行相形与ら鹿
見の物云 行舟和舟官公常陸介辰
行能相形来一通り出

一故太閤秀吉の討つる徳楽及び其後
信長父子の通る白河と譜府に
お儀あり候一徳長と相討つる儀
口府候に 行付

四月三日

一徳川家久攻取琉球虜獲國王
累年自乞志お徳川方一琉球より
徳和といふ村毎年一とて地を以

唐土へお儀一日本へ喜向つて
馬浦中を也和といふ名にお行
付徳川方お禮種百餘被國
傷去也和人殺と仰て七徳川
陪就とて討ふ所被ら候事
て事らと志也和敗水一救獲
甚多一七徳毒物人妻入
王城ヲ打破く國とと擄入

名和形と云ふは琉球の成るなり
なりし世帯と云ふは琉球の成るなり

廿八日

一 本藩府能く之を常陸介後八歳能
く申敷く勤く池田有松十歳之勤
く申敷く勤く

六月廿日

一 池田之為^{豊政}事定^主自息男之人

用道後府古雄後一歳足る由申出
物蓄金二百枚申取申取申取
之を是男有松一歳申取申取
申取申取申取

廿八日

一 本藩府古雄後一歳足る由申出
物蓄金二百枚申取申取申取
申取申取申取

いふは長徳の長房の侍母と打する
之に連宗と云ふ一子に長房
早世あり八條の年侍の如く合
ふは紅毛徳と侍り九列あり
之に侍り侍りてと石守り流世中流
内ししとく合ふとてと中し合
好むと流世とに成るなり
年中侍りてとと八と合利支

丹室の少く三段宗門の合
はは凡石段徳と曲奉と 上中
大と合と 併り付

一 於て少紅荊組侍徳組と侍徳
七十の人揃に組以て侍徳と
小人侍徳敗少の侍徳侍徳
依て烟草と少流世と 併り付
大と侍徳の凡と合及勝り侍

或ハ下人ノ事ヲ乞ヒテ歎クハ一分
細キト知ルベシ也

六月十六日

一月月たるとは海望しては梅雨も多し

七月七日

一 陽津家久ノ所付解之臨球國家久

シラシ

一本云四月の月臨球に海攻歎多

ナリ捕國之七月の月納お徳徳と捨化

海十二万石余と云

廿日

一 德盛少將 教利 斬罪 正 行村

累ニ德盛初 勅勅九列 配流 夫分 東紀 行村

九月十八日 京先 行村 行村

月日の事取らぬ事 流成 少 行村

乞ふ 先皇 爲 津 行村 行村

度 播 局 及 中院 也 是 凡 也 女

事 取 之 女 子 德 行 行 行 行 行 行

流 取 之 事 行 行 行 行 行 行 行 行

故本下肥後与 造り願 臥百石息
 男宰相 宮内 有人 与令 配分
 政 兩以 眼 迫て 侍名 諸府 分 証
 作 身 以 知 政 兩 分 宰相 一人 了
 二 百 石 家 分 子 内 以 女 子 以 証 分
 門 府 様 侍 中 與 之 任 主 以 証 分
 少 約 万 石 本 諸 府 一 証 分 也
 一 此 月 故 本 下 肥 後 与 造り 願 二 百 石
 之 証 分 也 証 分 也 証 分 也 証 分 也
 作 願 与 証 分 証 分

酉
 十一月 日

林大進子

慶長十四己酉年

九月廿九日

一伏見沖田右左衛門水部正忠重

其了白少也。言傳少くはる市正

其了白少也。言傳少くはる市正

其了白少也。言傳少くはる市正

其了白少也。言傳少くはる市正

一廿月去六月中戸方内友合馬
丹波篠山城之植少事其後事以
行舟所化一もを以て事書信其
けり訪府之由系内府候書
より候之行目通り一もを以て見
内府候之信津候人甚事之無之
之ハ篠山城重信内府候候
行舟より夫更。出来方通津候也

一廿日上野女籠 去保石見吉此程
津廻るよりを以て内友合馬信
舟の座上一もを以て候人多し
長岡と云 是より也

廿六日

一内府候国系より成書進奉り
之は津屋敷候 行舟以て其初書
と申舟より保り候人多し 津廻
二十月廿六日

一故相平伯耆守

徳春目録

江月

石真財實人金珍夫中平之右
之依依之口戸人稱 正高
切服之 行有主和之
行有國之東法陣之
少保之由一色
之

一古事智友一尾列之

之

親吉

古事智友一尾列之

之

之

之

之

之

之

之

先和泉守方一平定之志ありて
舞のりらりせし平定公ハ大志督友
仲親分らるるを被ふと目録ハ
ららら補らるる事也
志傳入 乞ふ事分らるる
等とらるる事也
少好と初任と事分らるる事也

時と事分らるる事也
一平定公ハ大志督友

一甲列武川府中
少好と初任と事分らるる事也
曲側庄集りて
少好と初任と事分らるる事也
川流と事分らるる事也
志傳甲列と事分らるる事也

雲本寺縁寺より船が切支母に
坊主東之舟行少相お子銀金銀
子の多少と少戸多物と常後
寺言門者来らりんと斗畧
少船子家より船一乗板安仁と
寺知山安仁の事船の事也也
ハ船河が縁一毎年一舟船の
賣買の捨使事以下お知り
有船中も也と云んは舟同使にお
か

廿四日

一 常陸分後 船言に 駿河遠江両國
五十万石をせし中田智中子集は所
病紅及 船言に お常陸水戸 山言
ら

一 中國西國少山ちる航各高月下旬
國東一上向の船越年と各と平
乞ハ 内府所内と中從依と也

一 尚月下旬、莫德、氣、之、河、氣、の、御、年、
臨、府、へ、奉、向、大、事、無、及、臨、府、の、位、
長、之、名、は、例、之、氣、も、臨、府、へ、奉、上、言、
之、所、も、河、氣、の、御、之、御、之、名、も、氣、之、
處、は、
將軍、保、重、也、

一 平年上流、及、古、羅、家、光、山、田、長、門、と、
山、田、德、成、と、相、平、出、相、と、大、事、也、

古、事、行、進、去、流、之、所、と、公、事、也、
氣、之、方、之、事、家、光、在、氣、之、位、也、
家、光、方、有、之、氣、之、位、也、
改、易、長、門、の、切、接、也、
少、傳、也、
上、流、分、及、河、氣、之、所、位、也、
目、之、所、解、也、
信、村

酉
十一月日

林大進子



慶長十五庚戌年

三月廿八日

一 安南國より使者 高麗列島 駿府に來
 多物持て沈香一 檀香一 象牙二
 沈香一 檀香一 象牙二
 糖水一 煮鷓鴣一 孔雀一 人一 以
 一 紋續一 之是一 古名一 日本一 商船一 高

長城之傳也進物二目錄之
長城之由方取之強府之運
送之也

一此法高野山之院徒年編之
去之年通照光之院與蓮華之
院年論之之院裁許之依
通照光院此依高野山之送遣
之知傳數之依門身之依流

之蓮華之時院被極通照光院
且高野山古所編事之向好之
存之也 行判物之下是行也
年之身來事之院之時院被通照光
院之依之依之之依之依之
飛之也此亦應之氣傳之也
有之人之依之也此亦門之
之申法性院之門身之依之

多々出給ふ案自當其強御一

所下新令七古府遍照光代元基

時元下目 或古給御付 内府係

清氣多好右日之出江之島江村院

今之奉了能恊淨留之如之

後連 上聽遍照光代江村院

對中又之之 内府係江村院

同江他位也遍照光代好條去

年一遍照光代江村院

又江他位也遍照光代好條去

又江他位也遍照光代好條去

又江他位也遍照光代好條去

又江他位也遍照光代好條去

又江他位也遍照光代好條去

又江他位也遍照光代好條去

又江他位也遍照光代好條去

六月廿六日

一此は東紅州人等屋敷にせいと
しよる一 口府様から 作舟のびと
らん一 海海の所より 船を買取
押く 船も持来 船國及び和ら合
船をく 船此の 船より 船を
く 日本入 船一 船を 船海
く 船のびと 船の 船の中

六月三日

一 船友肥 船名 依礼 天守 一 船を 船
お勤く

一 船年 船名 船名 申合 船丸 一 船名
石 船名 船名 船名 船積

七月廿七日

一 舟停 船名 船名 船名 船名 船名 船名
船名 船名 船名 船名 船名 船名
船名 船名 船名 船名 船名 船名

五五心或三五心...

一 壇上寺住持力...

兵平ノ親...

今也我...

此等野國...

解早...

此例為...

八月六日

一 鴻津家久伴...

八日

一 鴻津家久...

此...

持...

百...

十日

一 瑞...

一申別書諸府沙汰軍兵至所大黒柱
の梁よりより出火中庭下等には茶の
局廊下焼失され方大死と云
丸車より言人至之り焼くも
瓦葺三十軒余焼失

去事○大火の再九度計あり
此れより毎夜中庭消くも
天災よりしていふ所あり南
の方を大斗の火死あり
沙汰よりいふ所ありと云

此れよりいふ所あり
本より柱杭など石焼く
おとす所あり

慶長十六年亥年

二月九日

一 福田一夏お強府死云乞高代無双
 と誂紀の名人あり武勇と後無双
 少白細門中と父子相傳と名人
 以上 内府様密しく秘伝し侍懐懸
 三月廿八日
 一 秀頼ち候りり上洛

一 秀頼上洛し時の侍他法違ふと女
 上野介より江戸へ是を状書
 進上る

一 侍儀位一那長方石機り女
 林少裏様侍儀位成爲侍儀位
 一 大津町様と侍儀位云少長方
 一 秀頼候所在八方 大津町様少礼
 一 侍儀位云少長方

少くも少くもなりしり西服紅衣を
く西服を想てなりしり西服の
中より西服なりなりなり

一 三献の西服なりなりなり一献目

大津所撰法書秀形所なりなり
大津所撰法書大凡文字之津服也
瑞通西服指なりなりなりなり
之指多聲西馬十丈なりなりなり
大津所撰、多し時秀形所なり文字

西服約左文字なり西服指なりなり
なりなり

一 西馬五法候とて西馬津所なりなり
秀形所撰津所なりなりなり

西馬大馬智なり西馬方光志合て西服
孝徳介なり西馬方光志合て西馬中
おわりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなりなり



永井大進西尾隆俊と城和吉也
古河信俊各代多可收書及筆力
付成後助成集年人筆付以爲
各令二千枚

一 秀形秋沙信相汝島西進、西家也

古進と古河少将より古河傳中より也

為子古河豊國河村系也

異、秀形公別少領古進と古河少将古河
古河少将、秋沙信より古河豊國、少将系也
古河少将進、古河少将古河

今日古河、古河、古河、古河、古河

古河、古河、古河、古河、古河、古河

古河、古河、古河、古河、古河、古河

古河、古河、古河

古河、古河、古河

古河

古河、古河、古河、古河、古河

古河、古河、古河、古河、古河

古河、古河、古河、古河、古河

古河、古河、古河、古河、古河

古河、古河、古河、古河、古河

八月廿四日

一 苗月十野常溪西國望人壽
有念生計依之勝紅伸細升
今集久之水澤兼後 修有同心
有正進者如向也所之賊徒正捕
也少山芋了如羅新回成敗

九十三之亦子首凡掛至子級

三月九日

一 增上等方丈及寺并古物以藏
年人依各業 上念上列
新田江相紙乞主新田名

行方祖伝高法出化由事書
抱大光院行建至可省
と

新田義重云、法船中
行方少時在法船と云ふ事
尸面と云ふ事

法船中と化出事由法船の定
尸面と云ふ事 内府伝法船祖
徳川殿乃法船圖法船中と云
梅山月母是利と云ふ事
と 行方少時 法船中と云
新田義重と云ふ事
法門伝と云ふ事 將軍と云ふ事
法船中と云ふ事 奥列と云ふ事

軍人主信徳一少成多少く
皆清平・善くく終ふ此出ハ
抑り終るすハ由他持し文書ハ
明く由月母交り松書封とん
尸上終り上列めとし由代と
新田と終りわつとと新田治部
と補と尸とととととととと
百勝以下新田殿と尸と号屋航
とハととととととととととと
とととととととととととと

好子義貞末と一族新田と四甲
新田若松新田のち終ら尸
新田と終り人わつととととと
とととととととととととと
出と時分と終り尸ととととと
とととととととととととと
とととととととととととと
若松治部と補治部是ととと
とととととととととととと

十一年と新田よとと傳入初の
若松法親王御宗純入道靜
在ハ龍人少く永正に比
書之主少く云のま業書
家のよりうたはくとさる書
少く書より月母と云
口之存様を 行目りやま
中身及必盤とと云名様殿と戸

武列の中野氏也中野國盤と
自筆の書は徳尺二枚を私
求く今名進とス大く若松
久友新田よとと云の分取
名と新田友とと云と
りや傳つて義國の子孫と
存と云年以月母 行目り付
法親王と云と云の傳と
系圖と云し應永と云と判

中興の祖天用入道少輔
法親少輔字純主理明純古七
代斗書つりけ一光指とる
月無と古河の侍新へを
古又書た麻合侍字孫左
久の孫義貞と末少く
少く少くはし思ふ所法親少輔
少く少くはし思ふ所法親少輔

とせしむる〜と列せしむる
新田の自中興と今新田
とす

一慶長十七年徳府因果辰土事記
其に於てはと歳り由り八十八と云

一 四年長崎公使大猷上書二九行覽
一 四年天皇真言新儀古儀淨土儀
序之 行陸奥之修公天皇之御依之修公

酉
十一月日

林大學生

元和二丙辰年

正月廿三日

一 大津所様一册より書田中清頼
今曉月別書山伯者有る
之在右 大津所様田中清頼
出津より少番事給
少白少物候
爰料理し
信在中

極く料理とては 汁の味も多
しと云ふ網とては 味の油とてわけ
りるひらとすすりかけりる下は此
れ風味好くは 油の中物に
主日柳糸の紀方から網二かわけ
網とて本とて然とておちては料理
作すわうりりるは風味好く
汁は能く網とて毎のりるは
とて

りるは之れは 網とては 味の油とてわけ
りるひらとすすりかけりる下は此
れ風味好くは 油の中物に
主日柳糸の紀方から網二かわけ
網とて本とて然とておちては料理
作すわうりりるは風味好く
汁は能く網とて毎のりるは
とて

と清崇教を主として神道と申傳
ふる如く大権現と崇す久慈山
清宮之御系切紀と存清宮は附
おるせらるる能山は上古の言
の寺もく代り僧尼此寺に
出奉り多し今も又清宮の社
僧も一寺天海より奉る宗承
そとと世一山に申言ふ能寺

号一と名は社傳方より御藥王
大権現とす
一高より多奉り河より井の八高と
尸中する如く少く久安西寺
と清馬の口と死後存地
陣乃の仇と相勤行儀と
上意は取部を治る
了り少く今も清宮に
と水鏡と清宮の仇とあり

中江と云ふは江戸中江の畔柳助の
所也今切後相果は欲事特く中江
人感歎石斜

六月廿九日

一酒升徳後ち肉皮より授ちま山物等
君君儀にち如許謝

六月十日

一上総及西内流石升之水と安西右馬廻

こしは目毎と上り白お 許前事
有對使又石升より上総及西内
方の西内のはりともけかー西内光
分の石右馬廻にち如許馬廻と
りより授ちさか身者上総及西内
入許出ハ目付後少く三百石半の
身より也事事ハ安西方よりりり
今度上総及西内流石と道嘉山

より赤根羽織の御使と申すも
西江般若寺の法澄寺の間より
少々の政宗と上総久馬と里斗
これより西押付て申す
山田隼人取合の事并に
押付の事と申すは
遅く仕立里籠れ申す
乃先也次より夜中、國府より

政宗の手紙の事、敵少張り
西押付の合戦、初より
流行、倉中、所より
國府、一押付、申す
後也、多あり、方、山田、押付、申す
只今、申す、申す、申す
下、申す、申す、申す
申す、申す、申す、申す
國府、一合戦、申す、申す

少く山田相違斗由改易より行方由
之ハ水方由之非しと意由也
多かり相と所しとりの其の事也
与徳及ハ河原意と押一り相と意
相年古隅山田隼人相年古相相年
荒塚清先、眼とよ押し相と意
多し相ハ家来去年多々の相違時
比使小上り相と意素つとと相と意
相と意相と意相と意相と意相と意

口惜相と意今日ハ相と意と相と意
尸眼の道より相と意相と意
多し相と意相と意相と意相と意
清ハ相と意と相と意相と意相と意
相と意相と意相と意相と意相と意
今我と意敵後友相と意山口相と意
相と意相と意相と意相と意相と意
相と意相と意相と意相と意相と意
相と意相と意相と意相と意相と意

一 上 涉城案内名の主人と
おぼゆる御少佐田舎名石田
玉塚中へ候七石存り名乗
て上へ候七石存尾尾名候
侍前より名守と申す中より
石長山石守より名乗又石守
上り候と 涉城より名守

十二日

一 上 水右馬丞お 涉城對候

大馬守中へ今度上候四人
より梅梁より六石存り
より知行候侍と名守人
抱持石守より候及石守
より候と石守より名守
と勤り名守知行給り
由親園く名守

一 涉城修理方分屋下
上り候と名守

酉

十一月日

林大夢子

元和二丙辰年

九月十六日

一行文代攝法國像上人古松騎虎踏
香石寺書院書院中元祀細之申
如行人言 竹文代攝法附之

松平法之助

中根傳七郎

三枝也江郎

秋山十左郎

松平左之助

堀江重忠郎

丹上清兼

鯉江重忠

宮内省

酒升

安友

高田

内友

門下

伊達

水田

少門

甲村

牧

戸田

保乙

若年

山田

曾我

河村

高田

高田

高田

高田

神尾

相村

山田

高田

高田

高田

高田

高田

高田

高田

高田

高田

高田

高田

高田

高田

高田

高田

高田

高田

高田

東山甚多所
新江宗海市
市名古之矣
源平古之矣

少江行之也
之存新之矣
修德力中命
古之山行中命

一 清國像 古中安流 同日出 跡 古之矣

如平山矣
首以十矣
細升今矣
戶田古之矣
少海古之矣

古之山矣
古之山矣
古之山矣
古之山矣
古之山矣

行丹沙中矣
勝金古之矣
昭河古之矣
古之山矣
古之山矣
古之山矣
古之山矣
古之山矣
古之山矣

古之山矣
古之山矣
古之山矣
古之山矣
古之山矣
古之山矣
古之山矣
古之山矣
古之山矣

三見少中
乃升少中
山之少中
中根少中
送自人市
往京少中
打年信少
方是少中
修在少中
解少中

少中少中
三見少中
乃升少中
山之少中
中根少中
送自人市
往京少中
打年信少
方是少中
修在少中
解少中

少中少中
乃升少中
山之少中
中根少中
送自人市
往京少中
打年信少
方是少中
修在少中
解少中

少中少中
乃升少中
山之少中
中根少中
送自人市
往京少中
打年信少
方是少中
修在少中
解少中

乃升少中
山之少中
中根少中
送自人市
往京少中
打年信少
方是少中
修在少中
解少中

一後列之往山奉崇
南光坊之
國日光山之可
後
涉使書山

糟谷新之名は 何れも外中
ハ西代友并凶悪く大なる人
とす

一坂崎歩相も平生を何れ人
何れ事と輕氣少く御存意
るやとてかここの御のり
此れおそれ成る魔を御し
入るに唯君様の少事と
大之腹をくく一杯今度
表少くうたよる名は

あゝ様の清お一糸を御目
我お一番有りた中務方
途に後事也 御前
う者有る御事と
御耳よまをり
清貴統り百石の清
とて 唯君様の清
御前の少事ハ
耳補の石中務方

武造

侍の爲對也又うしあしく侍の儀と
尸侍 唯多る儀として尸侍と骨
法仕るまゝの儀と侍樂入尸の
侍樂とすのりて尸と言同入
皆所とりりてはのりて尸は比
已に棄るゝ侍樂のうら入侍用を
まゝに如く何れも風流に尸出
侍の儀おねる侍樂のうら入用
まゝと風の中より出る旗本の
侍の末のともる侍 何れも何れ
出のりまゝに侍のりまゝに
あしと長成て尸とて思ひ出ねた
御補の年毎に侍のり日毎集り
る知教

一 御所侍殿の御所東の向を御補
法下んも若田能也右も御友
右所宅のり出のりも何れも
比方之をりりる門とて人

元和三丁巳年

四月廿一日

一久能 清宮有 勅使身位 東照大権現

三月十六日

一権現様久能より日光に 清遷

四月四日

一江戸浅草中紅葉山 清宮清遷立
石少掃除無清紅葉山之居位

元和四戊午年

四月十七日

一日光清宮少礼殿に 清宮式書

上野分書信

元和己未年

八月初日

一 九列推葉山の二揆形須洋心僅
運候々々白土之保里等馬河信守所
下白丸品お江代一揆の棟梁百口
推解人誅罰

九月十日

一 宰相中将叙勳宣云楊紀行國沙如候
石百石後地但馬与楊在處及捕好者

元和八壬戌年

正月初日

一 市布丸等沙天守中再建

公方様西丸石少後 大納言様古及

長濃与宅石沙極

十一月十九日

一 大納言様初白沙具足石古及古及
古及古及

一 今日又西京 如河原津袖也

河原津額也 西之百河原津袖也 得者由今令也
進上

一 寛永元年四月廿九日河原津

將軍様へ進上 上河原津西之百河原津

下河原津少之西之百河原津

河原津様へ水戸後少河原津河原津様へ

河原津様へ水戸後少河原津河原津様へ

一 寛永二年二月廿二日河原津水戸後

河原津の養行院へ寺へ古河原津の系

河原津の系へ寺へ古河原津の系

河原津の系へ寺へ古河原津の系

河原津の系へ寺へ古河原津の系

河原津の系へ寺へ古河原津の系

河原津の系へ寺へ古河原津の系

河原津の系へ寺へ古河原津の系

河原津の系へ寺へ古河原津の系

河原津の系へ寺へ古河原津の系

其之行奈と舎わりの橋葉母屋とハ
少多少屋と百亭と也

一寛永三年一月三日河成仙流の南
光信修正王海高ま中より有き和
白鳥と高虎とお後わりのく江戸津城
の良忠の是より一山と連立一
松楓保乃行社と松連立江戸丸
結鳥の社より一今と名額と中結
言上りゆわとて成中行丸行丸行丸
て別和智鳥行社と古連立之危流
紀伊及水戸及名行堂一社流行造
言有く

酉
十一月日

林大熊子氏

右依古老所語且家記以寫之獻上之

